

照明 OFF



ナレーター：夢を諦めない
地域で支える認知症

「夢を諦めない」
～地域で支える
認知症～

< 場面 1 > スライド

2009年11月22日
夢野太郎64歳、花子60歳



ナレーター：2009年、ここは夢野太郎、花子夫婦の自宅です。
太郎64歳、花子60歳、この春で二人とも仕事を辞め、悠々自適の生活です。子どものいない夫婦にとって、最大の楽しみは、海外旅行に行くことです。

太郎・花子の席 小さな灯り



花子：そろそろ夕食の支度をしなきゃ。今夜は太郎さんの好きなおでんと、ほうれん草のお浸しにするわ。おでんは煮込んであるから、ほうれん草をゆでなくちゃ。太郎さんは、旅行の計画を立てていてね。

太郎：どこに行こうかな？

花子：えーっと。



花子：できたわよ。（食器を並べる）さあ、いただきましょ。

太郎：いただきます。何だ、これ。しょっぱいよ。

花子：そう？ 別にしょっぱくないわよ。ほうれん草も食べてよ。

太郎：これも、いつもと味が違うよ。

花子：そうかなあ？いつもと同じように味付けしたつもりだけど。

ナレーター：ふたりは黙々と食べています。太郎は箸が進まない様子です。

ナレーター：会話が弾まないまま、夕食を終えて片付けを始めました。
珍しく、太郎も手伝っています。

太郎：プリンあったかなあ（と言って冷蔵庫を開ける）。
何だ！こりゃ！
おーい、急須が冷蔵庫に入っているぞ。



さて、翌日の
夕方のことです

ナレーター：さて、翌日の夕方のことです。

舞台照明 ON

ナレーター：花子はいつものように、夕食を作っています。

< 場面 2 > 実際の場面

太郎：（別室より声あり）おーい、何か焦げ臭いぞー

花子：（気づかずに作っている）

太郎：（キッチンに入ってきて）焦げたにおいがしてるぞ。

花子：（慌てて）あら、お鍋が焦げてる。大変！大変！（と言いながらお鍋の中身を皿に盛る）

太郎：何だこりゃ！魚が焦げてるぞ。

花子：（構わずに味噌汁をお椀に盛る）。お父さんの好きな豆腐とわかめの味噌汁よ。

太郎・花子：いただきます。

太郎：（わかめが異様に増えているのを箸で持ち上げて）お前、このわかめはどうしたんだ。

花子：変ねえー。いつものようにしたんだけど。

太郎：わかめが切れてないぞー。それに豆腐なんか入ってないぞ。

花子：入れたわよ。ほら入っているじゃない。（と言って箸でつまんで見せるが何も無い）

太郎：どれどれ（と言ってお椀の中をさぐる）。変だなあ。

< 場面 3 >

< 場面 3 > スライド

照明 OFF

ナレーター：この日を境に、花子さんの行動が少しずつおかしくなっていました。



太郎：水道は出しばなし！ 電気はつけっぱなし！
やかんをかけて沸騰していても 気が付かないでテレビを見ている！
ゴミの分別ができなくなって散らかったまま！

ナレーター：活動的で明るかった花子さんですが、次第にふさぎ込むようになり、笑顔が消えていきました。思い切って相談に行った病院で認知症を発症しているといわれました。ショックのあまり、詳しい説明を求めないまま病院をあとにしました。

太郎：お前の面倒は俺が全部見るから。家の事も全部やるから。

ナレーター：亭主関白で、家のことはすべて花子さん任せだった太郎。どう対処すればよいかわからないまま、誰にも相談せずに妻の介護を始めました。周囲に妻が認知症になったことを知られたくないと考えたからです。



ナレーター：花子さんの面倒や家の事をすべてやっていた太郎ですが、介護は思うようにはいきませんでした。



ナレーター：コミュニケーションができないもどかしさから、二人はしばしば喧嘩になり、花子さんの症状は悪くなっていきました。

2014年

ナレーター：花子さんの様子がおかしくなってから5年が経ちました。

舞台照明 ON

ナレーター：ピンポーン

< 場面4 > 実際の場面

鈴木：こんばんは。夢野さん。民生委員の鈴木です。

太郎：はい（と言ってドアを開ける）。

鈴木：先ほど、小学校の前で奥様をお見かけして、お声をかけたのですが、何だかぼんやりしていて。

太郎：あ、どうも。今台所にいますので。

鈴木：ああ、そうですか。よかったです。ちょっと気になったものですから。では、失礼します。

照明 OFF

< 場面5 > スライド

2014年



否定しない！
怒らない！
地域の行事に
参加する

ナレーター：徘徊が続くようになり、このままでは、共だおれになってしまうと思った太郎は、藁をも掴む思いで認知症専門病院に行きました。
医師から「優しく接して」とアドバイスされました。
絶対怒っちゃダメ。
また、地域の人たちにも認知症を理解してもらうよう、積極的に働きかけることが必要であるといわれました。

2016年

ナレーター：さらに2年半が経ちました。

舞台照明 ON

ナレーター：ここは地域で行っているサロンです。

< 場面6 > 実際の場面 和みサロン



鈴木：あら、夢野さん「和みサロン」へようこそ。どうぞこちらへ。素敵なお洋服ですね。

太郎：花子さん、良かったね。褒めてもらえたね。

鈴木：今月のメニューは、五目御飯とみそ汁、ほうれん草のお浸しですよ。

（花子に向かって）お好きですか？

花子：（無言でニコニコしながらうなづく）

太郎：近所を散歩していると、地域の人が声をかけてくれるんですよ。お陰様で地域とのつながりも持てて、助かっています。（和みサロンでの楽しい様子）徘徊も減ってきました。

鈴木：それは良かったですね。花子さんは、徘徊ではなくて、ひとり散歩ですよ。何か目的があって、散歩するんですよ。そうですよね？花子さん？

花子：（無言でニコニコしながらうなづく）

鈴木：そんな時は、後ろからそっと付いて行ってもいいし、一緒に散歩を楽しんでもいいし。

太郎：そうですね。徘徊じゃなく、ひとり散歩かあ。いい言葉だなあ。

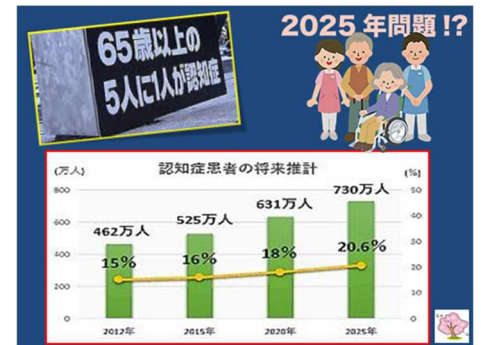
鈴木：そうそう、8月の和みサロンは、バス旅行です。
 おいしいお料理を食べて、温泉に入って、お芝居を見るんですが、
 （花子に向かって）花子さんも一緒にいかがですか？
 太郎：ありがとうございます。花子さんよかったね。旅行に行こうね。
 花子：はい。
 （太郎、花子、鈴木 にこやかに歓談している）

照明 OFF



ナレーター：太郎は、認知症専門医師のアドバイスを受けて、妻が認知症であることを近所に公表して協力を求めました。
 また、「認知症の人と家族の会」にも積極的に参加しています。
 さらに週に2回デイケアを利用するようになり、余った時間を太郎は趣味に充てるなど、介護に余裕が生まれるようになりました。
 そして、それまで諦めていた海外旅行に挑戦することを思い立ちます。きっと旅行での楽しい経験が花子にいい影響をもたらすことでしょう。

ナレーター：2025年には認知症高齢者は700万人、実に5人に1人になると見込まれています。喫緊の課題です。
 妻が夫の介護を、夫が妻の介護を 老々介護どころか、認知症の夫が、認知症の妻を介護する、いわゆる「認知介護」になることもあります。
 できる限り住み慣れた地域で、必要な医療、介護サービスを受けつつ、安心して自分らしい生活を実現できるよう、地域全体で支えていく体制が不可欠であると思います。



舞台照明 ON

あいさつ

